822
M3K5

湖月抄

あさしのや

25

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

槿 細 巻名ハ弄 再ニ 詞を以て是を弄ス 是にハ歌によつて巻の名とせり

の歌にもれぬあさがほの花のはなかりへそやしをるゝ人のをりに

はちれる花にものゝ中にあさがほのこれはまさにそひあひ

されくとあり 孟 源氏卅一歳九月より冬までのことあ

り 薄雲の巻の末と同年なり 并内大臣 細 弄同

斎院ハ御ぶくにて 細 薄雲の巻のまゝに式部卿の宮うせ給ひぬ中わりたまへるなり 河海に延喜の帝の御時に のことひろら。准拠の例ある也し。斎院ハ一代に一度かはる也。斎院ハ其の御方に服あれハかはり給ふ。代始にはかはらせ給ハず 師 此斎院ハ帚木巻の比よりの源氏の心あるひとよりわりの桐の巻に斎院にたち給ふて薄雲に父の服にておりゐ給ひし也 御心はいのほかにそめつること 孟 源氏の此斎院にそめて心を寄せてはべる御癖也 源のまゝのさたまゐるより心のとりつゝく まうてたりあるしもと 孟 槿の源のさうくのまふくをつらきことく 弄 此巻に と称ずるハあさがほの槿の帝 斎院 又桃園式部卿 女五ノ宮 三宮 也源少方 薄雲ノ巻也

斎院ハ御ぶくにておりゐ給ひにきかし。おとゞれいのおぼしそめつる事たえぬ御くせにて、御とぶらひなどいとしげう聞え給ふ。宮わづらはしかりし事をおぼせば、御返りもうちとけて聞え給はず。いとくちをしとおぼしわたる。なが月になりて、もゝぞのゝ宮にわたり給ぬるをきゝて、女五の宮のそこにおはすれば、そなたの御とぶらひにことつけてまうで給ふ。故院の、この御子たちをば、心ことにやむごとなくおもひきこえ給へりしかバ、今もしたしくつぎ〴〵にきこえかはし給ふめり。おなじしんでんのにしひんがしにぞすみ給ける。

みゝ月よみありてりくぞのくゑ　細 重服にありしかおりゐ給ひて其他ハはやくて哉
に桃園式部卿のうつりすみ給ふとみゆ。桃園ハ今の仏心寺のあたり也　東曰 桃園在一条北大宮
西一条西中許世尊寺南、師氏大納言宅也。保光中納言 代明親王男 傳領、号桃園中納言、
今案敦固親王 母同 延喜帝御連枝 并九月ニ薨逝 頁等相似　抄 二品兵部卿敦固 寛平四月日
御子母ハ延喜ニ同シ 延長五年九月七日ニ薨ス　河 大和物語ニ云 桃園ニ兵部卿宮うせ給ひてそのとし九月晦日
かしこの御方にてしこのゝ山音によりかへり秋のはてぞうらしきにつけてはいかゞそのみ
ふかくさの捨拾集に桃園にて侍りける前斎院屏風に書たる　かゝるものにもあらぬもの
そでもまさしくてか
女五宮　細 式部卿宮の連枝也　孟 斎院の伯母なり
このうちにすみ給ふ　抄 女五宮もかのうちに桐壺のみかどのみはらからにおはしましけるにや
今もなをしたしく　細 源もなをしたしく又聞え思給ふ　孟 桐壺の源の同はらからなり
おなじ寝殿　細 桃園式部卿の家の寝殿ハ女五宮ハ東をおさめ給ふ、西に斎院おはしますゆへ
あれにけるこゝち　細 式部卿宮薨して後、程もなくてあれたる心地しけるにや
くらしかりけるもかくてしもあれはこそ御出ハ一段かなしみありけり

この宮にすみ給ひ　女五宮ハ　孟 葵の上の母宮ハ三
の宮也　桃園の宮ハ女五宮そこの
うちとなり　細 女五宮葵上
の母宮ハ又女五宮より年
すこしわかくて女五宮よりハ兄宮にて大宮ハこのかみの

女五宮もかくてのみ
よしおもひてさうらひ

なが月になりて、もゝぞのゝ宮にわたり給ぬるをきゝて、女五の宮の
そこにおはすれば、そなたの御とぶらひにことづけてまうで給ふ。故院の
この御子たちをば、心ことにやむごとなくおもひきこえ給へりしかば、
いまもしたしくつぎ〳〵にきこえかはし給ふめり。おなじしんでんの
にしひんがしにぞすみ給ひける。ほどもなくあれにける心ちして
あはれにけはひしめやかなり。宮たいめんし給ひて御物語きこえ給ふ。

よろづしづかにこゝろぼそく
孟 大宮ハ葵上の母也。こゝにハ大宮をいふ。女五宮ハこの
いとふるめきたる御けはひ、しはぶきがちにおはす。このかみにおはすれど、故大殿の宮は
ぐじうき女五宮ハこゝに立て五十五通不入也
あらまほしくふりがたき御ありさまなるを、もてはなれ、声ふつゝかにこち〴〵しく
おぼえ給へるも、さるかたなり。
院のうへかくれ給ひて後、よろづ心ぼそくおぼえ侍りつるに、
年のつもるまゝに、いとなみだがちにてすぐし侍るを、この宮さへかく
うちすて給へれば、いよ〳〵あるかなきかにとまり侍るを、
かくたちよりとはせ給ふになん、物わすれしぬべく侍る、ときこえ給ふ。
かしこくもふり給へるかなとおもへど、うちかしこまりて、院かくれ給ひて後は、
さま〴〵につけて、おなじ世のやうにも侍らず、おぼえぬつみにあたり侍りて、
しらぬ世にまどひ侍りしを、たま〳〵おほやけにかずまへられたてまつりては、
又とりみだりいとまなくなどして、年ごろもまゐりて、ふるき御ものがたりをだに
きこえうけたまはらぬを、いぶせくおもひ給へわたりつゝなん

細 桐壺の帝の事、女五宮の詞
細 源氏の詞
細 源の事へ　抄 身ニ罪ナキ事

三

いとゞしく　細 女三宮の御事也
命あやうくて御なやみのころ
ひとすぢの御のぞみ(?)を仰しも
あしさまに思しうちすて朱雀帝
崩御の後源氏須磨の浦に下向
などの事也
うくて世を遁る人に
細 源氏のとゞめ給ひて
さくまで(?)かく大臣になり給ふ
みづからもおもひしかども
給ふとぞ
ことなりとてもかくても
孟 源氏の御かたの事を
いとあはれに思へり(?)
へしとこの対面に満足とぞ
いとゞよろしく　細 あさひも
ひて源氏の御心に(?)仰せ
らるゝにつけてもまことに
あはれにてしるしありて
くるしく思ふにけり

いとおもくなげくして。年ごろも思ひてしかたく、ねたい
のたまはするをなどおぼしたゝれ給ひて
かたくなしくひがみたるさまにてもてなしつゝ給
と。いとゞしくわきまへしくいづくにつけても
さゞめきて世をそむきし御心を思へども
ひ。命ながらへしつゝもおもしろく給はれど。
くてあはれにまゐるさまにひとしくなりしうへ
あはしきころそうしてまゐらせ給ふ
ちかしくまうしたまへる給ふのぞ
きよげにいつもよろこびまゐらせたるも
みるめもしるしもまいらせしなし
めしとゞめ世のこゝろひとつのはかなき

ことゆかしうおもほしけるに。うちつゞきてうちもの
ざまかしくおぼしめし、たびたびのうちとけ
あはれなるにかしこくもてなさせ給ふ
ありけり。さうらひまつる人ありて
くちをしきにとりなしつゝ、まことにぞ
うしろめたくしてもおぼしなげく
くるしむに人のなやみつ給ひて
しかしてうちふれ。ある人にもおぼされ
くはしく年ごろのよしとも見ゆるに
ものおぼしめすにつけてもかたはらいたくおぼされ
よからぬ人のことゝもおぼされ
わがしやうしくともかくもおぼえ給へ
あやしきまでものし給ふ人となむきこえ
とさぶらひけりひめ宮やのひめ宮

きこしめしてのちのつかへまつる
らせけるとなり
細 源氏の御心の中に源氏をとゞめ
ゆかしくも思ひつゞけて給ひ
よろしくおもひて給ひけるにかへりて
おもひのやうにおぼえて給へ
この人のかたちもおぼえ給へ
むかしの源氏の伯母宮へ
まかりのやうにおぼし給ひ
ともかくもとり給ふとぞ源氏のお
しくいはるゝとぞ
さうのよろしくおぼえて
事と源氏のこゝろの心に
みな人わがしくおぼしける
おぼしよりけり
細 ふかくもおぼしけり
人とのみこの女宮たち
いとゞ細女三宮の御後見

んごろにおほしとふらはせ給ふの御けしきこよなき
おほかたの御ゆるしにてもえあるまじき三ゝとゝり
ものあはれなるべきおりゆかしくおぼえて
くちをしうおもはるゝを御らんじ給ひて
まかなはるゝをもてなしかへりみおはしまさ
ずかしこの給はすことゞもおほかりけり
とぶらひきこえさせ給ふけしきいとあはれにて
御もとにまゐりつかうまつるをもおほしめして
かくてのみやはとおぼしなりて
たちまちにうちとけたまふべきことにもあらず
うちわたりのことどもきこえさせ給ふ
よろしからぬ人のうへにもあらばこそ

ゆるしく衣かへてえならぬ御そでのうへに
かくれなき御ありさまなれどもいかゞせん
さしあたりてはなにとなくわづらはしき
ことゞもおほかりしかどもやがてこの御ことにおもひ
まとはれ給ひてけるをいかばかりかは
ひき色のこまやかなるきぬにすゞしの
ものなどかさねて風のおとにもおどろかれ
あはれなるけはひなどのいとしのびやかに
このひとつよりもいみじうあはれにおぼえて
ほのかにもきこえさせまほしうおもひて
からすることもなくてひとりながめ給ふ
月のころはさてもかくしても御こゝろにかゝりて

河 細源 神翁 閑雅

あらしの世ハみえ共よるよる 細 湖月よりの事也 花鳥 紫式部 歌語の語人待らまて世花又 宮の御事也 孟月 面白き也 海之云 らうそうなし 細 年月の事 おもしろく思ひ知るるとも けなしこそさゞめうぞら 細 源の君上以下 何ものも 不定なる也 細 年月ハ歌説 人これを まてまことありけれども のぞみなる思語かたし只 とハ歌説ならし見るをも神 のゆかしとハきこえをも也 らうつれなきさと源氏 うつろさすく世よあるを よくまつらぬこうてらとは あまて年をとりておもき よく思ひしておもしろき 今ハなみよのいくさめ 細 今ハなと つけのあハきをもなるべく しかるをもいとしゆかし

ふるき世語りそぞろにあやしきものを得けるとて、わづか
かしこきおもしろき世ハされ共よるよるもてハまよ
ひんさめてそゞろなきをめやしとおもひあへるこゝめ
ざりて皆よらるるもハおもひかけやさしき恋
こゝろすゞろに待らんとうたいはしまりつ。
源氏云
げにこそさゞめくさき世なれとてそゞろるをこ
ことよつけても契しつゞけしら
源氏云
人これをも我のゆかしと待ち出てら
つれなきさま残るとも見れ。今ハなみよのいくさめ（源の詞）
よるこえを語りんともいんなんてよるまで
らうしきことも侍らし様に何くもよもひ
きんおかしうれ。いかにことさらしさずとゆかし

よう物語るこえ也 槿 歌説待る内語かれハいつまめをあらしとの語く 細 源氏ハ物語るこえ 抄 槿ハ歌説よ申せし源氏もそのうは めでたくもてなしてやうやく事を申せしよつりまつる
の後久しく契りつるうつき 細 人待るなりてもしるやの人く
まくしまて 細 源の宿縁
こそも見て若語へ心位ふ
宮八年目らくみる語さまふ
らぶへくの心へ花もし
まるハ語ひふくあらく法性
のあとくハ源氏の内本因
世たたさてハいよいよそう
こなたうかゝさるを
このゆくく語ひ也しまふを
ハ云ひてうくいさこまもし
きうらま思ふを法語の
語ハあらなとらく
みゆくく世の 細 歌説の内前す
く世中の衰へりとも云うら
語とも神ハあるらへいまく
いゆるしまりかへ宇
国よ云をうら語へ噂之
て世のうふとふよと神や
いさめんと歌説のよ語之
さまふの風よ 細 河海よ見え

あれからよ申しぬ。何かいみじとてひうしう（細 源の君さも答ふる）
を今すぐに何めくしきけさへそひまさる
なりざるをのといかうるもしあてどれくる
の月もゆはあそざめら
槿云
すべて世の衰ぐらをとふうしにちうひ
しらし我やいさめんとおれでおもれなうぞ（細 源の詞）
のよれつきいそれしあとの風よしらへて き
よの語おもひぞやうもこゝすれしつんそきてぞ神（安説）
いつで待りけんならぞうつまことをとさこゆ
ふも。まめやうよいとうさつきいうぶ（槿の詞）

あなし東南の風をいふ也 穢の詞也 一切の穢気を祓除の義也 其神をまつる時詞を用
とらハ是ならの風よせらせしとりさふらふにかなるん大海のそらに 中臣祓云科戸乃風乃天乃
八重雲乎吹放事乃如久云々 先代旧事本紀云伊弉諾尊曰我所生之国唯有朝霧而
薫満之哉乃吹撥之気化為神号曰級長津彦命次級長戸辺命謂風神也神名級長津彦
師 歎息より出たる風也 問て男女の道をもちひ罷もあるれ今もありぬべくハそつみへ
ぬくひのされまんされハ源よそのひさすふでもなるしくらのるえ
んそさきを弟ハ 細 源の詞 〽まぜ〴〵のみをさを弟ハならすなるへと志うかく罷ありしとて 今を
まとさて八罷よつると思あらゆらく 東日一説 所 まゝさを弟ハさえより 定高ありと数尽
へ中何く源氏の志思あるでなやらかやありもけとらりく志思しの御穢を弟もう思あそ
もとろわれバみどくぞなりるま しらかれてしかしも斎院の古人宣給るれ[illegible]やうよハ
中あくらきつくうつさしよく
せつ君はのまいふ歌 細 此斎院ハ今りつりくんよむひく方のんごいさらしるすり
つんをありかなやめり
細 さふらふらくのつんするる
なやむこし 右斎院のまゞ
うらのあのかなるをせ女房達
のいふとるつくし
すきくしさきやうよ
細 今余ハ人のそふ所をせ
て玄給ふさ
せおうらぬやら乍を 細 源氏
後よるる御く引まる君の門
分そ金めありて出みよ喜きろ
人のなたかくすりことぞせめて

ねはありるき限りのしく月まそへても物なりくろ
とひさりあそこえきろうし[illegible]あれとぞ
なりるるやめりすきぐしとまやうよありりね
おい源氏わろ男の事とのあふく
なきるぞわさそうあしくれとらるすげさまて
源の詞く
しらぬ給よまそひのつりりふけハ物ありあるとく
そなるかとかれたよまありぬゆうれとぞ

ろそとりまつりしくて 所はよはらくねやつ達をはハあしうとき給のといつんなく 斎主らう
人のなまつりそるとてを云せらるおそしよりまつぬやつ達とのまつり今そさりのそくえ
ともせまんやうしもさるかて物ありくありしらひまありてとさうらしらう詞く

ま〳〵そきまよきとしぬまへくやそしおそなし給
ひかるとそ 細ふらふさんくさめさえてえ 出給ふまづり所をさまでて例のさ
そしあつり 細 九月卅日の事 御かくらこの霊をおしき月どもよ
本の葉ふ乃善るひまつりきくもぬそきありあり
け衰とりくしつぐそのありりく物しくくを
衰ふをふりくえて給し出かぞへみどとも
ひ御やくまゝすくやましくてゝふら御給ね 細 是ハ源の御そく
あいましてねさありふらよ物何しつゝけく君
とくとりうしまへくをあて 細 格子とおろさ 綱曹をさみのあ
られる花ともの中よあさらかのこれかれ

とうそして 女房也
細 斎院中くあまつれ時よ
よらり給しとくを右斎院
の給ひつりうりり源のふかく
中通ひるひまそを斎院の
女房たの古家ヲる

あきりわのされつ出よ
細 九月卅日之 孟權のらり
おりりろく書せさをおひ
とハ文の多く文の白之書状

これハ前にさ紀にもやう
みもなくその名もなかる
さるよみてなるく
あさやかなりし　細　此ハ源よ
りの名相なり。まそくし
く籬の花のあはれふかうひしも
面目なきやうなれどわきまれ
がくこまふゆりわすれくや
俗とく　孟　あざやかに白く気
うしろの　細　源のあはれ
まへまへの名にそ八重から
まぎらし槿なりる事
本意にはひしてそのうきれ
るなどいふべき下句の心
槿の花盛ハ過てるさるめ
なりと来しもべき也之心
八重なんしをこゝろ事也
野　源氏のありかすといとき
あはれ　細　名のあつかひ
といひしてさしんむ露
し
御心なとまやもろ
いとくおれなかうらんと気
の露あり〳〵からかしい事

はひまつはれてあるかなきかにさきて。
匂ひもことにかはれるをおらせて奉れ
給。けざやかなりし御もてなしに人わろ
き心地し侍りてうしろでもいとゞいか
が御らんじけんとねたく。されど
見し折の露わすられぬ朝顔の
花のさかりはすぎやしぬらん
年ごろのつもりもあはれとばかりハ
さりともおぼし知るらんやとなん
かつハなど聞え給へり。おとなびたる
御文の心ばへにおぼつかなからんも
見しらぬやうにやとおぼし

ころのありしの様とさりとも世り〳〵
のとくかなよくむしとおもかく　師よの面よ翁然
まゝすハいかう　細　此は源のよそへ
かくてよそへ給ふ心ばへ
秋はてゝ　細　此は露けくとも
ての面ハりと来てあかす
と給へる心は見るべし
あるよ用るらハまれ給
くおかしきもなう書
のまきまよはかりなるさう
ようろひろあさまれ乃
こ海と推つかれのつまく
このわりしさ　細　今按ずるに
の門あるよ　般若心経のこ
とうりもそひきへくられ
てよそかうるき花の露え
あやきあるんとあるも君
身の養人わありし海り
例ハいくさにとある路
く　花鳥　槿ハあるき花之
さそかうつゝさ御心まま
とハ新院の御心なれハ
にまてり露まくのことハ
御心の中またハ露かく袖
とうりおそよりせるそ

秋はてゝ霧のまがきにむすぼゝれあるか
なきかにうつるあさがほ　似つかはしき御
よそへにつけても露けくとのみあるは
何のおかしきふしもなきをいかなる
にかおきがたく御らんずめり。青にびの
紙のなよびかなるすみつきはしもおかしく見
ゆめり。人の御ほど書ざまなどにつくろ
はれつゝその折は罪なき事もつきづきし
くまねびなすにはほゝゆがむことも
あめればこそさかしらに書まぎら
はしつゝおぼつかなきことも[illegible]

なごみのおりしき　細　いつくは捨てしきみのこゝろすゝもなきとあはれは久須之
人の身に　細　茅子は池之るゝの猶善なりと人の猶くはわしく深りるのくあし
ことをあり拙之まれハ奥ありとやつるすも猶よりつり傍へくさしもるきこよの
なきられも世るのをして　師　是ハ九て賤善の寺などハ其人の位又ハ出さ海ふかくも
南庭ハ彼の雖もすくみゆかるすもあるよ其れまつきくしくまひびてらんと云ハに
ハおくゆがみてしまりりしぬ事もあり紅葉れとえりさよ手まひわるとりし搦の比け
此初りゆかるすきやすわりさとくえりゆかむとハ元罗ー事搦のゆかむごとくにつとるさき
るの　まはすゆひるすもまよハゆかむるすあるとく
立かくり今さしら
細　只今ハ例あらぬやうに生す
ひきへどりりく
りてしるれね　細　歎院乃
源は一向よハりてきるれ
なぞえるすぐハかりし猶く曉
さしらくり　細　只り悔り
さらにろすそり
すふく悔人くの
細　歎院よこふしぬ女房
すゆり
こしをおくぬきハの
孟　源みつらぬ人ハ中もるあく
べき那のんがるさ女房ち
ど八此源のさすとよにたく
めでしそしまりとえあやま
孟　源ん紳く
まんりくりいまさしるまはかくしぬれふそ
ぐきこるすでもあげるまさしくはおもとどすすを
りく茅よりり子、とるすれぬ比勢の也おりく
比茅よ逢あらねるらく
ふらおしくてきとなりとおひつゞえくやむしきこ
じく見さられハさしくりてまあやりる
細　二条院く
すし猶新人りしのまのよなるすれおそして
細　源の猿ひすすく
茅子は比より立之
きもびをひくつりてしひ猶さふ悔人く
のさしとあくねとえのくとしとぞふえざすひそさ
ちりとハこなりくさりりしも兄ひ
からん猶よ思かつりく
立八そのりをしてるよ
細　源も之を年なくま
しまけ内ころもつ生まき
てる猶し拙よとく　師　文
と八槿の斎院とさそし
今ハいりてられも忍ひ思う
へき　孟　槿も源も此よりひ
もわつおしりぬのかしいよく
忍ひもするれまつて忍ひる
なん人さとハ合りのすす思
ひらあえつるさすいとおく
もとしえんし
まりるさ本草まよりけるの
師　風流めるぬ文字とよハ追
るすそとももわつとこそれ
をりくしくしくや人のより
なさんとのそ思そ面のりて
それさんとらしと母わりを
とく
うりしく　孟　今りにはるま
しさ悔よつまるするりく
源もんのとかつし
やらとかりなすじハおやまりちをあ川あくめ
でらうあれど、さやハそのくてさるまこしつ
くゆかりしるすれさりしを。今はりしてさ
れを忍ひるるらべさればしもひ見てゆそなくて
ありき本草よりけるさぬなりあどし乃た
てそぐこぬもとりくくしくやとりなる
なしんなと人のあはれいひまとくもらう猶
つくらとけまべされ新立をなけまとくは
やうぐく母まじさ悔おかりれんぐへるまこよの
人よりくりめりしてくそねりてもおひ
すし猶世中よりらゆかしこまへ。前斎院より
わんびよるとて猶人ハなん。女えるそのごとくよ

せの人はうつゝ　細うく心はさあふは源ハおくんそとふめ給之　孟　むそうよつまつまわりうりもせ

ハことよわくくもみうしくも源の心をあふく　細世おもハへぐく兆おつひあり

世中にりうゆかしく

も可能ず　ゑやしめもとふそふく

ふそしハさりうくも

お業の上ハ世の事のとり伝語

と云えとももさやく気家

ありもしあれよ分くし給

りしく志ゑしハ之ひまひ

く師明入のりゐうちも源

のつくれ業のうへ下つる

ひのおしうず明入の書こま

うらつけよめくくめまへて

孟うらつ中ハ蘭奇之へそ

きうじとハ色ひまずくゆうつ

かそやうくらとつをまへ

とく

世親さあとも　孟　源のあ

くうれうやうこふあれハ

識りし業の心得まつて

お源の中花のおくうれうか

さ恥さもくしゆらく

すめくきつく　細　去実るか

と殺めるとなきゆうの事ひん

まつちくゆりうゑすら、せげなりくねはわ

をひあうんまじいひくうと、御いのゝ人さ　細　業平ゑ

つへんきう給ひそきとしいさうえときさわ

うなりしんともあくハへづさく八ゆがりし

えうじと如月しうれどもつけよめ

どめせめて、まれ傍親をあざるも遠いあそ　細　源氏

どれくいれるもいくまあくしく如ぎ

しむうんとぬつれすくらかれはい

ひまし給ゐひようしおとあらぬはりのし　孟　宮

あんじ、えてゐるは曽らりやむじやきく　孟　殺のることゝ

つまうすくれりつれよりひまし給りんうし　師　業平へ源の事つまうゑく槿の事とふりれるやのや

うよ言ひしくしうしくし

おあしもら　細　業平上武アマ之の息女也槿の殺戮又之の中子なりしハら　業曰

まてくしよ蘭より　お　槿とハ源の親しき光を殺業の心をさまりて

年ころの語りそうて

孟　業の心中之師　源の業

の上とも年来罪をおもてそ

さうひまへいりし槿より

今おしあされてハそうして

おるんと如何もとく

ふうきえる如あうき

出よいろくとひそれ給

ゆくまひ槿よ源のうへり

ちつても常上とむりしの名

あさすくもそあかやうまハ

らもあつましそれと業の

上ハ世きうさき時よりえされ

まつるひつうしそうれそ

源もいやそくとひあるう

さまひて槿みきのやうに

いみえ、えじとく

まうそうすそそくらえて

みとしみくうしん　細　さとぎ

さかりつとしてそ之　師　大方

まあ沢はんのぐとうりおなはびくくしくくふなく

をあへいうれと、年ごろのはなしてあろ人をど

ハうらおまふうるくあすかはおうも、ひきへ人　細　業の上もかふ孟ハぞへおみんくらすなり

よそしけされんしみしみじへくれどもゆかりし

るすけうかきうとえんあきさ浦ゆはとそ

てあし給をそすとも似と抱きうるうきさ浦

よそさるれわつるとしころのむつひのあつ

らそしきうるさうりそをはおうし出入なりと

さ海くまとひそうれ給よまうしきこととそ

てそうらゆへるいめくうしんえうえそて給

ちかきさまにてうるはしくみえしあをにふへあれ是ハ源の御大事なきゆへ
寝覚の二もまた実よ(?)御かくうひまうらくおもくいろをとりてしあふをえうらくみかくさ
ことなく
うるずらまけくありぬ　抄これ
もろのあくうるまうにま
ぶしくうらくへし
やくとハ文とを　細内侍の様
の役ハ文と申(?)侍けりと云
よみて
げの人のことハ　細紫上の
らく人のすなかうことハ室
云ひそしハおほきなしとし
委人去之哀うとハ辰也
のまけくとうとよる熟之
氣色とうよ　細おぼしうけ
よくと老うる世給ハまうと紫
上のうしき給ふ　細縑(?)雲の
らんわさるるとも
あり十一月たりれども称る
と停廃もらくし　抄萬(?)き
のこすよ諒闇也

へおはしやうよつくしとおぼさば、気色も　孟内裏へ
給ふをぞぐしらうあさめぐらまうらうすくく　抄源の御心のうち、ことさらなく
さびしくかりやくとハ文とうききへつげ
人のこといはむかしうちすてさせ給ひ気色
よそちかうくまへうしもじくのさう之
ひさしく給冬りきりんけさなじくもとまり
てさうくしきさよ。つれぐくとおぼしわ　源の様の事ぞ
まりて。女君ざまに例のらうつきすまり給ふ　細女文字之　師これも様にかうる
うらくつまてえんなるとそうれけよおろ
うしき程よまれさうげぞよね。ゆよめく
きさらめ給て。こゝろまうけさうじらく

ふしくうらん人々ハ　細様のまゝ
奥心あらうみだり　唯孟日
師其ま也
細すまのあまのしほやき衣
すまのあまのしほやき衣なれ行ぞ
うらくのことゝきかりまさ
まされ
細紫上の句
なれ行こそ
かれ行ぞうき世なれどや
源氏の御事のしほやき衣
まどくとおもふらん

しまつれバいとゞこゝろしもうらん人々ハいか
ぐとみえたり。あまずゞよおもりおさし。　抄源の世人いらひ母こなく
をこさうし給。女君の思したりしさまこく　源須(?)
しまふかうと。ようつゝひさうしよろすへくて
ついおやきこえ給へれバ。えりし。やつれ給へど。けうらなる　細紫の上之　細此紫薬之
どもしおほくひもちいつしいつ　ゑすなそらく
めれるぞすかぬぬと。おやくしくれ　ゝしさる　細源の須之
うきれなころれ。つゞきのや。さりわやこき　源の御心まろぞさかさと書
衣のおほりめされきぶしてあつく給(?)ゆう　同よこち給ひ御事もあさらやさとまく
まやとそでとぶふえそくなどまるいうなだ
きこえてまへハおれゆくもそげにうきさこ
とおもひかれとぞうらう。そぞうちあむ

宮に御せうそこ
細 源の女五の宮へ也 夕
まうへくまじきよしにて
まかで給べきよし
を仰せ給也

まことにかれまさり
細 紫上の心也 かれまさらば
果給てんと也
内より外のありき
細 源の詞也 今は内
の外のありきは物うき
式部卿のみや 槿の父也
かうぶれ給へるにも
かはるべく給はじとても
のべて給也

ふし給へるは(源心)、見すてゝ出給みち物
うけれど、宮に御せうそこきこえ給てけれ
ば出給ひぬ。かゝりけることもありける世
をうらなくてもすぐしけるよとおもひつゞ
けてふし給へり。(細 源氏の衣裳をとりて怪腋するなり)にびたる御ぞどもなれど、いろ
あひかさなりこのましくなか〳〵見えて、
雪のひかりにいみじくえんなる御すがたを
見いだして、(紫上の心)まことにかれまさり給はゞと、
しのびあへずおぼさる。(源氏の詞)御前などしのびやか
なるかぎりして、内よりほかのありき
は物うき程になりにけりや。(女五の宮の事)もゝぞの
宮の心ぼそきさまにて物し給も、

人々にもの給ひなせど
紫上よりのまつべきとれ
我慢ようしくねはは
うつくし女房たちまの
ぞ也
御すき心の人さげき
細 小門は雑人出入する所
より給はん
ことも源の給はじと
細 今日は雪ふりてあれば
思ふより給はじとおぼし也
見て給はじとおもふとの
給ふべし 何 かうばしおまへ
人といはんがうるさし 夜
もかけるかぎりや
そとより 孟
御門守 閽 論語 閽人 閽
加度毛利

式部(槿の父式部卿のなくなりて)卿のみやに年ごろはゆづりきこえつる
を(女五の宮の源をたのむ)、今はたのむなどおぼしの給ふも、ことわりに
いとおしければなど、人々にも
のたまひなせど、(細 御供の人々の心也)いでや御すき心のふりがた
きぞ、あたら御きずなめる。かろ〴〵しき
事もいできなんなど、つぶやきあへり。
宮には(細 女五宮也)北おもての人しげきかたなる
御かど(之)は、入給はんもかろ〴〵しければ、西なる
がこと〳〵しきを(細 西門より入給也)、人いれさせ給ひて、宮の
御かたに御せうそこあれば、(女五の宮の心)けふしもわたり
給はじとおぼしけるを、おどろきてあけさせ
給ふ。御かどもり(女五の宮の門守也)さむげなるけはひ、うすゝき

こゝろくとめて
細 あゞわく おゞおゞわく
花うぐのなりきし
ざゞりのいくく
細 門の鑰のからてさび
つゝきしつかれし 行ㇾ收ㇾ馬蹄ㇾ
生ㇾ易ㇾ蹶 用ㇾ締ㇾ 仰ㇾ鎖 溢 難
閘 白楽天
このひとふおわげると頼よ
ことゝせのおほく
ゆへとしうかれ ことせのは
細 考 表紙年 ことせとせのお
ことせ一家之その中ハ源氏
今年此一家之 宮方此
とうのまこうぞと思ふよ
ちや此年 ここに於おり
しかと叙しあくさびみそ
ことせて開く 天文三九月譲之
仰られあまえのされなそ此
此のいつとをかれなりまつけく
見譲のろうやもく物のあり
見れいなりやとかくせどんなも

ひら以ずさいでらそでとこゝみをとえわけや
らぎこれよりはのおほくとらさずさな
ありしにはくともそれざめりのにそ
いくさびよそれバおりぞとられおりや
源氏 わられとこうしめぞ此日のふと出かけきと
頼よこそとせのおうてさよくも於より乃
世それぞとこはぐらそめれやどり
なまえおりひもそてとぞ本家のいろゆをも
とうつまとうと箕しまてうくらむるひ
り
源斉 いつのまにかよりけなぞりくしむをわれ
常より思しおれしうちねぞやしまうしく

うと繁みもせてあくなりきこえまつかりそてんやし
ことせらおり 用之 ここそとせハ三十家之 源氏一家まで此とせつく 河海花鳥ことと
せとおり 花 源氏七家を成より於へなりまふぐらし八代一家之今年六十年よりなり
ことせのあるもとはろハ大方久しき事よハミとせとされと代久しき事ハ三
とせのすうことハ氏にろく
いつのまにか 細 せの変もちどそう
てびうしくひとうろひ
お 門の鎖のなくひとうひ
とハのさてろふえ
閑らんとしねらうつかても
お 源氏ハ襷のかさへあやく
ゆきとてわげとゆへり
此事ろあつこぬて
明 源てきく
のびきとろ
ひきの強 孟 曉行 真経史

細 女ある ひらうひおけくいり頼よこやのけらるに氏
きいのれりのがらうきてし頼は 於 女あるの此物つ かろこくとぐ
より海之 とれそこよろとあるさこうちろじあゝをとと
孟 女ある河欠伸 曲礼 らぎきよ笑もわらひらしらそびひま 女子之
源の心 え川らしまへどもれつんつ もぬそろのずわふ
どひそし初れども 掏もえ家やらんどもの
をふ用ごもすくいびさしとりなうてゑうね
源ハ早く立夜於ならぬ之 よとをれバしろひあがしさらおさ
是 源内物之 まさんとよおうよやるさいでとあるめしさえ

りこえれど　細 飛花落葉
ぬ老人の詞也　師 源内侍
の詞く心あらくて任
ところを源のさりとも
ゆかりんといひしはいかに
おいぬもしまゐらぬをうらめ
しきと恨る詞也
源のうへハ
桐壺の帝乃御事也
このあのほどしまで
細 源内侍るこ尼なれど
いふ也 河 出家の後ハ男
女とあるよ家人と思ひて
むすびと源氏ら也
なかしにかへる離人と
細 源氏ハ今叙りおしよの
給ふもいひてありても
去給へさとなくあへしら
ひまゐる源の仁恕の心ふ
くまさけありさ叙なる
へし 哭 源の仁乃心ふかく
しいうらうしとも流さ

ちぶらひしてまゐりさる人ありけり。こ
それどもなうしてうらんとおもひきこえて
さすがにさもよあかりのとらをりもでさせ
給はぬまゐらん院のうへハ。おはしまさくとき
らんせ給しかど。おもかりきてまゐらぬを
あり。源内侍のすけといひしひとハおはする
まりて。このころやのほどしてまて。ところみし
まつしかど。いとようにあらん丈にむこらぶ
給ハざらつる代わさましうちまりぬ。その世の
こといはれむかしのまりなるひしど。ころ
まなさびおもかもなろ便そまうられし
きれにしおりなおやかましまかさう。ひんと

まかぬかりりあんちらひ
あるく去るそりやくことり
山のはひよんく家の難
人老女やかし
ゆひらしそも
細 身をうしといひしを
まいふ今ハ人のうへをも身け
くづさけ親身の年ほか
よるをぞ忘れていまごこ
りし悪しおの年よりた
るを見る人の上を思
源内侍親身の老をいはず
して源のうへおひらる給
と云也 弄 一勘 源内侍
の年のおもる老歌さる詞也
此君老らてんるなども今
うへと云ひしきけ身のうへ
よむかりをみると云べき也

もぐくきのかへりしとそじらぬまかるれけ
そひよいうぐ若きひあかく。うりがなく出家
めりしきさ侍りしそおしていてうしそけ
のざまするよあらくさつきふかくじらざれんとい
れかすくり。いひらし同じくまあじ思へから
まばゆさよ。今老をさそりおもいのめぐる
なぞりてえられ給りのりく。ひさうへこれ
も家ありこのさうりよいじらし女れ文
衣おかいちらそらすく心のひあのはの
ひそすてそろのきこえるよまするへありて
あへのあり。へ道の文なじのけいらひよ。

愚按此喜伎のうへ細流の由緒え川たまふりての喜え喋苑の由緒え川たまふりて
の義このむとうろうりたてうひくうらゆへさかり源内伯ハ紅葉夷喜ま年七八と
今ハ七十あまりなへし 源氏ハ卅一等らし
いましまさうろ 細 今更に年うつる花のやうま源内伯ハ思ふとも花ハりとうりの花うかめて
よらく 源内伯若年しえ人ハ七身九よまう花の年うる羽よえうすうくよふれ
このまうりよ 細 源内伯の年ざりうりよいりえり女御あれもおしくえうも芳るる
よくうる給しをえり
入道の家あそらの 細 舟雲せハちご昇 今とうる給ハざうらとゑりせハ不定之 源内伯ハよくかく
かうへて給ひさらせ
年のかくし身のありうらく 源内伯ハ津孝
うけさきま
一命のありをくるげなう
給ふうるもしなべ〳〵ともあさ
めさまざしうる人の余を
ぐく今てとこうひあぐうて
あうハ花ひもうろうぬせうう
ましし
細 く世中の変
ものときめきさ
と数とたまるすぐさうると
源内伯ハ宮身のよそと露打
と芳のうらと友れざうるを
年 うれど 細 梅やの秋と
ハ世ざ世かくとありしたく
此りやの秋いとかなりうく

あさましのこ此かららしに 年の陰く
身はのかりすてかけさよふく〳〵ると 梅
くらすくもしなんのゆきさかりての
やりよどころひともうらしてもかりてのど
なるハ独りすぐくさもこのうきさせありし
ゆかりにも 梅のかをれるけはひもとうろ
ときめきさまにほひくりやぐ
年 うれどもの袂をぬらしれね ゆやの

とひてまし 宮よのるまよハあう
ねなるえし 花ゆゑゆくとさ
思しれよゆやの秋や月
ぞりうの葉ハみりおとゞ
とうりて
身とうへて 細 うぐきあての路
え没世まで 秋とまもうし
あいうきしく 孟この世と
云まるをえうり師せ世
まで八方播 秋とハ云もしき
ようり
ひと海ふつ海
細 まつ美の貞女也いとひ
うなましく給りて
ありつかひく 花 源内伯
のうろやぐまつてえそり
あうまも又月さしおでとしま
あれハ師完の月秋よるうぞ
「てみるく」 細 河海ま枕草
みずさうしさ秋ふうるの事
まうい志うもの月秋とこと
但高時流弁の枕草子に
此ずうし 此本よ付う是
之但法抄調云文元備が許

ゆやかのびしやらうしとさまかれハ 源
ときにして
源 あさむへて媛も給ふよこの世まてゆやと
ものさしてあるやし こ のかりしき 契
ぞや 今のどりかぞさそてまあさんうて
細 さらすぬのりゆりてはハえらうしまの
とれど いとひさんつかくうらんといふて
とそ ひと海ふつ海ハゆゑさ没月さし お
てらもうらかつを照る雲の光まおひ
てあかくれてゆきしわきこのさ海なり
源 わりつかひくのくろげさいとよこの
らなりのくよふれさうひとさうしとゆが

しいづられて かなしくきこえ。こよひは
やりまうでしまで。ひとくしとめくしなどらを
人づてならでの絵りきんとおもふ
ゆきもさきんと。かりやうてともめらくて。
ゆうし秋も人をまちやりまへてゆうき
し世すくらよ。古文などのあかしをあげ
しど代わかうくらくんうしとおもひはめて
やさみしとしあもおもすぐすぎ。つきなきさ
ほどおくびとこ点をいとしばゆうらん
とゆりしくさうしすうどころかれにらみれ

いさらくてさうわうしこん多の月岳の花ふも心くくらざりなるりと名の月もこゑうきう
くさしげのの男とらしし冷しき物よ云なるらんいうでと見え給。めの。又むしこの奥ちう心をす力し
えさうり。望が翔同見よ河海よみくらり 師 細の此歌め医し 師云の月の冷しき
日記河海よりたう。奥まあり嫗のあくらのるす心らうる桂華よえまむり。ひらさあつ世ていふる
なかんし

細 今え
人つくおとらく
おもひさうさんともりを
人つくあらくそいひよしも

細 文選ハ
まなまの
源よりなどおへ路しこ
とも

ばかりさぶらうつくしとおもひまさりて源
がまえもしくなすくうらしてあるとおもふ
ぬ人つくのゆかりもなどぞそらやまさや
恵をいそうかるゆま。風のけしきひあげ
しそ。おもふまいとものかぎりぞえそ也
まださ雨よそほどよとしのごしひはそて
つきなき代ぞよこりぬらしこそ人の浜
らきまへとくつくまれ。うきつ川ちりとの
おひをそへろと。げにくさもしつつしもへ
さいのきー句
わりなくてあまりひきそへひとのへくり
うつとさてしころがくるとをしりうつつ

つまるさよびうしに
かつまるさいむしうら時
もされよりぬらう父
のつらまよくそてつもとと
ふづくるのく 細 河海引
わくこ侍れどもうて寄え
よ宮男のめつくとなる
みろべし 引 つもりし も河
らのうぢさずれい多角すく
ゆそそぞうらふ河海三考
の四千用之え 孟 心 ニヨツカラ
わくうあて 細 秋院の真 日本紀
ケらふとれくまわくお
てハツテて用つきぞとと
人の上ふをくてやうに役む

とあるじあるあかゞじきうるゝの云ひはすてゝおりおよいかにひめ給ひつるとゝ絡白
ならろにかとゝのめりかかり是下極意の所は当時のうとかなれやかゝへなりかとのうへうるかう
しあるは師めるかありて一の部是を極かの所は当時ならうれとすかのうめくそあうくなのかの
まけれやらかはへてえへるとへ盃のかうりとえ年あり不用之ちゝ
いとくしあれさめてはま
源の的之盃人はてあり
きとつつや。つまなきさを侭
おみ翔之
いうこし川 細 からし 絡
かとや 師 あとかられ
きとかふもうれくさ
るほてそと宣ふくさ
らいたやあまきの絡めの
ちと則とこの源の山首
いやつ川いうしてうく
御みもしらてれ
あきくしかつかくん
盃えきよきかつ婢人を
のかく室有よ源のさき
らひあらあえく 抄 室有
あとよれ、めきをうひ
かへとれもく婢人の何ま
かちかんとおへくく
からきうりしりま

源んく
こしはすくつどしうこしまてういふかひ
すくていとめやうまえで中なていぞ絡ま
いとらくゝあつこらしまへでいとりくよ 源の絡
のふしまかりめでさあんゝさ海れいりし
絡ちよゆかくいうしし川あじよあうれく
ちやとそきらよらさめきくうくらひ 抄 室有あかゝるくくひあかあられ
あまんとどうあでしよりかくん、へとこともあれ
かうしけるあれかゝまゐすけとうれでも
あてあらうて絡らんゝうしるまとさ
めでゐしはら絡かね御助きとんゝふし

抄 さうつ婢人くの云何あうりかうりかうりけあへしらひのく
らうしあほとしうて 細 源のんはゝ人のんをと中うりてそへしゝらうこゝをとはあかうすしきとき
うつ婢人くのらうくえ 年円
けは人の何ゞの
細 母源の仰く源の仰いを
さひあり亥うなもそへあき
也 師 母源の仰ん仰内事
らゆり下の詞仰んつらひ
とをよへしやきしくきが
ささるえ
とよるへその世元人の
細 洪衰とえしてうくうるよ
よりてきさるゞ絡き吹 ヨノツ子
のつゝよ思ろしきうべきこ
まやうかくゝかうひゐり人
しと源く秋院いと疑
衰ととうて源よ人乃
りそてあうごくるびき
絡とえしてはいかひらうと
秋院思まくる也
かいうくしき
細 んの衰とも源氏の見絡
つんとえらうしきとく
人つその仰いつく 抄 源氏案

うとうへげまへ人の何ゝのかゝしきうみもおか
みなと中わりたうしねよいおかしねど物たゞうか
さ海よろしけれどそてとゝもべてのよれへ
のめで中ゆんつくりやらひあまれらじうら
はらくくさうろの何ゞもこゝり絡ね
べくそうゝけるあはれなる海ひとしよゝ
とはゞすゞりうんなるけといそいでわりさ かるとのえへの仰むをとはかるえ 何出重く
しばしの仰りうりるごと くらうしてむか
けふかれるまでゐ絡よきうて絡人つての 槿のかなく
仰いへゝしきうしでるてん、年いとばね
そつらつうしあふでかう仰とそしそひえかと

へだてかけり時も宮省なくしてはかりなくものゝさまよみえし 愚案 紐流のはかなく
年比心づくしにおもひつゝ 細 御息所もそれは煙の結縁もなきとのみそなたにひきこえ給
をのこどもおもく心をかけてしまゐらせ給へるは心なく 弄 御息所のかくは結ばれ給はぬものゝ
まかり給へんの心ざしにて 細 おなじ心にまかせてまかるべきさまどの心ざしあれどなかなか人のゆくゑさへかきたるさまと
はかりことをはなれぬひとつゝ 細 おもひしまかべきさまどのこゝろざしあれど
あかくいとまめやかしき
細 御息所のかつてひやうし
くちをしくさらんく
孟 源のかくをうけまいらせより
世の人のはゞかるべきさまと
てうちとけ給へる事とて
のゆくへ結ぶまで源氏(ここに註)僧也
されどもはかりかたきまで事
よりまさりて
はるかに 細 菜局にたえ
たえぬせうそくはいまだにまさり
べし 弄 とりもなほさずに
しのびまかりぬるべし
花局はかりかたき事をなき
とあるに 菜局には見え
さらもまたわたりてあると
おやうしたしは物語は性遂物

ハかなくそじよそふかくはかなきことゝ
とりてもすれど わすれもまくらい
まめしきやうならしさらにて人のとかり
おとゞやつとの人のくらさがおそるおぼえ
しそうめしりけるはいかゞかへ人みちも
くは給ふびつゝはかなつひしかるびつゝや
うくはおとすひとのとし給はむかう
のさんかくゆかさきりのしまへでゑ 細 別殿これ又 門流
ちしうましねびてらしくちくゝやのゝら

ゆけりて やらしまさん 細 源氏の名第本巻にあり しげくともしのびてはやま しとて 弄 ひつしへんがり わりしとおもびおもひ ごとし
けはひ人のはかりごと給うこと所も
所領の御かりうち給をもとし
て 孟 奇流の清寺と源
しく 抄日 愚抄 抄 孟抄 今案
まれつがでで世のかりがかり
まかりくと誤うりて地
とかくとまりやうつのかす
くといひ給えれと源の
胡の者よりあまてへまさき
アそ耶ありけれどとふむ
と細孟らい今源の仕事の
しかれは師說一遍也や

ひとゝもなくゆかしさまさばらりめでたく(細 源を指てい)
人きゝなどもつくしはなくあなたに(細 同人々源)
これひとりとどめをむかしのあそびものもの ひとり
よもなきとかくとりくさ源氏君のはかなき中をもさまあるへ 細 見しら源氏君の中をさまあるえ
しきけり らうしくもあるまじくよきものがたりまた〳〵
のかれさまよまけてやさしきに給へる色
げにとゞこ人のはかりごとのわかれくだ
よあさまにほしくりのとよくやかにもそう
世の人のとあやしげらめをうしあるめ
まで書よりもおもらしまさりてかゞり 孟 うきしまさる細 経
かれば今さらのはかりごとめでて世の
すぐさむともかりしそむしつらぬ

若よりくしもかくへへましき
かくて　細　源氏世にあつかはれぬく
なりのさまもくも侍なかり
給へ　孟　説也　源ハ今への
なりよりくしくからされは
へいとく分別のまゝよつせ
まかりてとりかり
あやふかれかりてゆけりと
何かりかやとんてとがく
らかひらハさへそらしれは
くさまでで思ひさ
まらせ給　細　源の御く若葉
とせ給へく　弄　上僕の
よまに源の御へんときこ給
かそくらくらもゝかゝ
らよ内ずことなく申し
るわりされハ此絵内にの
こ物られるのこ事きて
とそらりとのすへて
物かたきことも　孟　源仕
の物をゆかもとけり思へ
朝廷の政事とみつ人々
さうきにはそそ御ずとも
し給し此程の事ともを

はよく人もなんかくへしいつまてもんとは
うらうどきて二条院よ来られつゝねね給
と女君へめもられまくのそゆかりて心の
孟 紫上
細 紫上也
ひとまへとおもくもしらかりきかいりもあらかく
孟 源氏より
らん御やうてましいるしね御気色とこそ心
孟 源御心 細 源のおやりて給之
紫の
えがさかれしそれぐしとやうきとやりつくい
孟 源の紫上
とかしと物かしこつゝ御も思ひて女は
女子也
しをきゆかしひるり、まなことをまて給ふ人
冷泉院
のいとふくしきよのとき世になかしころ
のあり
もとろかうしきをなかめやかさわてとく
左大臣のこと
と物し給てそ、御づらへさきさくしてあけ
さすらんとの御とのさえ御あすへしはるかる
紫の

紫のらくもをまゆまつりて
のべてのすへて
わびまゐる代　三ノ巳
わりくしくも悪し給
ふるまなり
ずゞかうてぞそしてくらそ
こそ　孟　紫上ハゆるさるゝ所
より源のもてなして思ひなる
うにわえんしハ徒よある
ひきやとし
つゆときさよりくまもし
おゆるさぬとせく方よりなを叙
しつうさ御くく又紫上を歎
きくこうへ御心とありれども
おしかしてか御あるへし
つ河ハららかめ給　二の領
のられいなをとひやし給ふ
もゆりさや
然流よまうらかしこて

らくぬしころ物がたりもしてきりよ
給ふ御とくもゆうてはわかし事
哀なれど今はまりとききこんのなりよ物が
を出しるびきひあれどもさこそいとなひや
御源の紫上をうすけなく
つまもすく人のなきこえてぬき御まりの
し給へそらくさけまでくまかられさられ
細 源ようおもひたまふこと
ひさいかこ御さつくへのまくどいかくそむ
紫のすかく
きそりのとくこて給つさもいとくゆる
源細之
ひきるゝすゝすくしらしらくさうきて
よそつゆすきまるくまでくをうくも
わかさるのわさやとり河ハかりなるめ給ふ歌
給よてるあしごとこて御ららや、かりし花
かか
ひゝむろくさあるそれハいとりそこるれさら

細 さうらく源氏物語すゑつむ花
それハいとそえまれより 師 それハ名利のをそく根まへいさやゝもあらそとくとありつ
らくハさもあるさるると八月五日よミえんとく
まことやすまする くまう
あひぬしとをいひう
らふうしかり
くるりんのまへしとも
細 箋注にいろのしよを
もらひるべきらんなと源の
乃伝云 あ 言ひしきるに
とわかねともいひどくしとく
しくハ箋云かりとえん
ぞう まとく
松と竹とのたぐひあ 細 さく
とならさ 露の三海く 松
と竹と雲の併ゆうやう
香羽あり

ことよとのうらしうらすひてん 細 此頃の空ふえ
よるうけどもきさはんとへなうかさらりく
しくおりく。あずきしぞ はむしなすやすれ
まうしこともつまりしよりの 給ふるすれど。
細 命危せ
うへ海さらのれいくへるどもしまんとうまれ
てえたとてあかりねとも
ろうさう海よもわしいねとう 三実は不
しもされへうへらうしとめでハうしろめ
わのすもく
さういあうこしをぬりひるをし ふわしまくかた
日ひとひるくまあすし 給ふ 雲まのいひくう
つりうつうんてよいいからりゆつ 松と竹と
面白きを侘し

侍しよつあてても
何ま秋ますひとされてわ
きうよつ何よつあろくうう
ゐとくか
冬の夜のともしの月よ
何かろくてよりありて
ん冬の月ものぞめぬと
らさうまりく補 細 面白侍
也 猶よるかりくありせり
つりぞふ花もぬるもいう
でふ雲のしうの月とて見
ぶうんと家陰の中あ
もくうのんうつへし
すきおぼえためしに
何箋日記云名のそのうら
の此月いとあるさに櫻花
ろと人てえてあるうす海
ドあかしの月のまある
とさうされど。見ともろ
冬のさうこゝさへよいの
月ともそ哀なりろう
師 何海は女細云の櫻葉子
をひかり櫻葉又に師説
の月夜と云細なりしと 細

のなげのかくしうまあらなぐれよ人の心 盃は人の此
うらとえうきらてしるあ。何 侍の何く
てもゝ人のこころをうらをめうまに
のきうまもし冬の夜のとかの月よ雪
のうかりのひとく空てもへおくもつる
さ地の身よるてこの世のかりのことまて
さやらうそ
とびあすられ。蛍すらうとも哀さもありし也
蛍かりうれずす海じさあしまよいひとさ
われ人の心あるくうりてもことわけ
きせ源月のくまなくさうあて。ひとりをさま
ええもきされさるよこ月れきう来載の
くけうろらなうしう。やまゐもいひとける
雪月ともに白き
中将の海も
さえ月のまへし

私孟諸抄の説く前ニよあり　細　香炉峯雪ハ撥簾看のこと
ミチすきをわけて訪ひ　河　雪園
応和三年閏十二月九日丑下
石清志多部祭　則一
推雪作蓬莱山
ござくのおとみえぬれき
細　よろづことをそふく
ことを知らふふしらく
略しくわかへし
私一條　童ハうそことゝもく
よき給れどそれをとゆき
てあらあぐらりきつきう
りやあなあハあらぞでき
かよりきめろ給く　細　後の
ゆびそどけるすき
の事くあらしハの広み
昨夕うへし　私　事ハ文海
せしまの後あく
わらハ若く　細　中にあきさ
まゆ童気くあさうれみよ
奥しくう酒く　私　中さむ
げゆうしみなし　業平面後
みちとひ相わり帰らくハめくき

うちとびて池の氷もえとけけるを
ぐきよまりくへゆうて雪まろげ
をさせ給ひしげるうすげさしらうさ
ども月まゝへてゆかりそゆるれを
がき酒くのおとみえぬれどゆびしどけ
すきとのるをどうさる酒めてうまこよ
あうあまれなうこのもと思ひもうさ庭よ
婆の異ニ雪ハ白れ奥ときくうき
はおしてりくもやしくやうしとけもわ
るうちいきまはしらしげくまんこ
びらしるよあふさんどもゆりしてうら
しげやゆうしげするうつゆしゆゆかる

てたり
あつさあども　細　女の扇とりそうことハ面をとりくえんよめくされて扇
ちとけらくしの女房も或ハ色をせうされ用之擁扇之孟郭
女ハ扇をさそこし扇るのまくつふづさばうの月にそハあさこ
かくつけれと　細　力を入て
みよまろうえんとすうえ
かくつけハ貪せ私ちうら
とうれそうつらたうり
貪生スツヒト桂仙宮
ふりしるみげよりらよ
山さてまろび侍るをとりしへ
しくしゆくし　眼前まこう
やうのけしき面白き書
さ酒く
ひらせ中宮の御すへよ雲の
山　細　海の上へ渡り給ひ
中宮ハ藤壺也、宮山乃
ます河海忘きまうえて
伏見院後伏見院永仁の比
中そでハ此まゝ遊ぶの祀
猶すをみてうり説く幼
まなりして此居せしとく
西德子二年二月のこと余

ばさむとふくつけれどえ　書の本ハきりこれハ気ひとつらをう
まぞワあけうえへハ東の山もあとよある
てうろりとるげよまくへ二世中宮の
雪へよゆきの山つくられたりし
うちるしとるれど枝めづらしくなまえ
りえれとほ忘るしまつりしられるうぬ
のゆりくをうけて　薄雲の中く世ねて　色は外のまゐりそも
わうられいとけどうくりそなし給ひく
源の君恋をまことかひとふてのまうく
くらしきかたありき酒どくこあるし給ひ
しくとはあうらしうとあゆうとひのわて

日の須ゟ書つみしうふりさるを此段ニ於て思ひ出るまゝにかきつけて物ぞ

りかよ雲の山伏とまかりぬ石しも名られば其の堂に

庭の石碑よ作られ…祖師…

みつ雲の山石しよ始りよりうれば雲山長法二年後長保二年の…

給ひ寛弘の…一年…年…

山を…の雲を…

雲山八名…

山伏…

…もきさ

空すらんのむ　藤雲の内裏よおつせし…

よろこびやもをさ物かは光しうりきうし

涼の藤雲を…

しらふのことわしてとあつころあけりよ

つひとおすごもることしてひしにけそ

いそいらくおさともえ給へぶり

しじりふりひおりてあふさ滝よなるみ

さくしけぎもと長すし給しりや

又さうらりのみどひありきんや御…

りそそうろくしき

細　夜よ…

さ石八…

と

空つろうるとびれけ

孟藤雲の御…のやえ

らうあしとしどびれ…

あしうおみくふうつり

かくるかくかわしかならり

やくあれと又出入より石

わかく一夜哀房のらく

…てハさりへど

細　…の…藤雲ハ

やう…紫の色と

ハらうり

紫のゆへよ…

師…

むらよ…藤雲

と紫…とみれしゆり

されハ…

と…

雲を…

とく…

てり…

んじの…

前秋夜

秋夜の…

おきハ…

又藤雲…

さう…

…

前秋夜…

又…

うゐとびれより物…

さう…給し

とぶみをそへさいへどさしのゆへ

よおつしずりの給めれどおこして

づりつきげそひて…のそ

とうまへ…

ちうふと…

きうじ…

そしわきを…

わうりそこの…

つんとの給閑給の…

くゆへくしきう…

てわうとうさん、ありて
秋もみつひせしるべきあり
つれしうふとく
おやしろもおりなり
細 源氏と名とられ給ゆへ
ゆへしきとく 師 なり、
ようろふさん人の源と
名とられふすふやし
きこゆるうとく
もちふよいとしおしく
氏 源氏の旬 勝月秋のす
ものそくらわぶけ
抄 源の名たかりしと思
おきくやうれ拉梅おり海
してたそく好きなる人は
そくやうのよう好わらん
と人のくんとの名て 細 秋
と源梅ありまして 内侍
のうち梅のふりあらし
源氏の此句く 孟月 衰時節
抄 よ同し
たいふさし 細 秋哀情なる
うんましきわりやまろなる

新鹿の旅とわつれないひかれし源氏の秋もみ
わきもうすらおしりそくろうれまく
つまけの人の心ろとおやしくもそけ
みつとしたうみしの絵へぞきりし名海めぬ 細 源詞く
しうさうしさ女のこうりしゆは 勝月秋之
知るおけるべきことぞうしそもふふいゝ
おしきらやしきこしのゆかりうれぬの
しらおくけすぎさうろ人の年つつり 書段
めりまれいりよくやしきこしゆ所らん
人もらへよおきこそげいけさしゆりんし
ぎょまとのことゆひおくくうんの書かんげと 箔雲々
ぶのをうふ山荘源おりしらるへし
めども聞もそうししゆさしゆひ門。この名ども

山里の人こそハ 細 是より
師 此上とおめての所く
どいかしめ給へぞもとく
男の名よハやくしら名給
の心すとえろへなれとくハ
みぞきつきさ人まりとや 細 此上
人らうそしる 文
文給の女すなとふかりぞ
ぞひおかれるさ海 抄 旅
桝より八思わかりらくく
それもわきりきし出そう
やうよめやうく出此人うれど
こし文統の女ゆへ源の名ふ
けらうせむして出とく
いふかひなるき 細
源のかれ
給人の名うさのそらなひ
みるさ君のみの人ハおかけ出
ど。そ中つよたうくべきと
その人のまれなり
さるとさうしなえかりぬ
細 此人の所ゆるなきうれ
とく師 人ハ花散のやうる
えわくぬりの事きとくし

とおもくれとし君も給山里の人やこそ 男の名うふの八もよまもてとく
男の名のかぞふれやくしらすさなのくみなき
えうべかれどもふかうしろうる人と梅おれ
ぞとひおかれなき海とをもそけらて侍る
れいふかひなるき秋の人はおきなどず人い
もぞれするへくるさ世たりや东の院ゆる 細 花ちるさと
ぎもうへのうそなくへしそ。わうでつるおう 此旅なるく
をけまさゝることもうえわくぬりのき
こうろうまつけりくの心ごと人もよりつく 抄 師
ともあしゐるもゆおじやうよいみつ海 古今花散ハ心ろうねく
しげもゆりひとくすぎさめうこの山ふかうそ 今とても花ろうえ
さうそもかくをもおしけれなりもす秋を きやうろうきこ

おもひ侍るめれど。昔今の御物語に夜ふ
けゆく。月いよいよすみてしづかに面白し。

女君

こほりとぢいしまの水はゆきなやみそらすむ
月のかげぞながるゝ。とを見いだして
すこしかたぶき給へるほど。にる物なく
うつくしげなり。かんざしおもやうの。こひ
きこゆる人のおもかげにふとおぼえて。めで
たければ。いさゝかわくる御心もとりかさね
つべし。をしのうちなきたるに

かきつめてむかしこひしき雪もよにあはれを
そふるをしのうきねか。いりたまひても。宮の

御ことをおもひつゝ大とのごもれるに。夢とも
なくほのかに見奉るを。いみじくうらみ給へる
御けしきにて。もらさじとの給ひしかど。うき
名のかくれなかりければ。はづかしう。くるしき
めを見るにつけても。つらくなんとの給ふ。御
いらへきこゆとおぼすに。おそはるゝ心ちして。
女君の。こはなどかくはとの給ふに。おどろきて。
いみじくくちをしく。むねのおきどころなく
さわげば。おさへて。涙もながれいでにけり。
今もいみじくぬらしそへ給ふ。女君いかなる
事にかとおぼすに。うちもみじろかでふし給へり

源のらすし
しげく経ね　細　今称物
さもりかつぶんこ地をと
しおいろもしねぬハ宝を
秋の祈し　併　ゑの秋に
とハみゆきらく源氏の帝
みよまう経く赤の巻まえ
つるまさ菩とるうけく物
るまふつあるへし
さしハすて　前よう言
ゑのくれるよりゑれ祝
しう吉めとろうとのおひ
ー般蔵てのさめとせ
上へハゆまるし文のあめに
両しへ誦経の布施をとつ
ゝそまうしるるへし
この世のよらり　法　法華経
五濁悪世　五濁ハ　劫濁　見濁
煩悩濁　衆生濁　命濁
かるわさとして　いるの
[illegible]

でゝかくり
とけくゑねね経仏の飾まで
源のらく
かれつる兄のあざりいとたうときにて
しと出ほもよしくゆさすてつく
文の此のひし
てふくよ出ず経すとをさせ給ふうすれ
めしと経しうしくもきのぞそ出ゞ
まく斎通の有て
さるまんしどころひどゑのひゝまう川
落雲のるさとえ
よつうういびあらしれありさ海るありじう
斎通のうく
このひとびとしめくぞこのよれふぢり
とすゝき経いぶうんと池のこゝろをとゞう
くゆりしころよいまじくあうしやれ
細本文作　あろ人のさき表紙
いろすゝわざとして　きのくんのまかせうい

ゆきそてつみよえろてまかよ源のうりて落雲をもてくりんとおもく
母をもくひしころくのくるゝまつりとくとく
あるべきさせらり　孟　あろ人のさきしき表紙く　細　一本　あろ人のさきともくへと
例のうち宮
あゆかあるよ仏まさざをまし
落雲のゆふあもて源氏
のわくられて法すき
としう後りて人あるし
とおもんとく
うちみも法ぶの御かて
細　至上落叙の御かり
ひし後ハ源をようでける
くし経ゆへ源に法く
をおくうり　異なるに
て夜居の僧の奏し
いかふかそもうちの源
氏をうりしけ自すくし経
のしかくよいめく落雲
の御ことをあうせさせま
つゝとく
あすし蓮ふかとこそハ
しそいかくいんるにハ回蓮に
とかきゝ人はきしくとよ

なはとらんとそのひとめしよまく
でゝ川ゑよもりうきくしなげやな
つゞくと出がりそうれにしあまりと
らそくおまりわざとり経らんべくと
見えさて川べしがうよも御こゝろの
とむかい出がりと前やあらんと言て法く
法一心不乱　内外絶縁
むめどよおろざりけとをとありうけて
初らそえつけ念えし
れんじをり経出がすらすりとこ
そい
深
すゝ人念をあるふかろよまうせてまり

げゞねおの瀬りやまどろんど咄がまて

例の狂言の句く
ぞうりけりゝや

のゝりや　細　各留守庵裏

花葉のんし　盃一つ池中

華盡蒲花華　惣是佳

生人各留半　座乗華

葉待我嗣没同行人　五會讃

なき人を　細　いゝかうよそひく行　浮きとし生れはそのくまんまま　ぞ八

ミつせ川を〻りけてくゝ